

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 30 日現在

機関番号：43601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：25884013

研究課題名(和文)ユダヤ哲学の論理としての無限判断とその現代的展開

研究課題名(英文)Infinite judgement as logic of jewish philosophy and its contemporary evolution

研究代表者

馬場 智一 (baba, tomokazu)

長野県短期大学・その他部局等・助教

研究者番号：10713357

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：無限判断は、哲学史上これまで十全に展開してこなかったが、ラトヴィア出身のユダヤ人哲学者、J.ゴルディーンは、ヘーゲル的な閉じられた体系とは異なる開かれた体系の基盤として、無限判断の論理をヘルマン・コーヘンの純粹認識の論理学から導きだした。この論理は中世のマイモニデスと現代のコーヘンを貫くユダヤ哲学の特徴とされる。ゴルディーンはこの論理に基づく哲学体系を構想したが実現には至らなかった。思想形成期にゴルディーンから影響を受けたレヴィナスは、「体系」という発想は拒みつつも、第一の主著『全体性と無限』によって、この論理を具体的な生の諸相の下で具現化し、国家に回収されない開かれた社会の存在論を描いた。

研究成果の概要(英文)：The infinite judgement has not been fully developed as philosophical system in the history of philosophy. Latvian Jewish Philosopher, J. Gordin has revealed the logic of infinite judgement from Hermann Cohen's logic of pure cognition as an open system of philosophy, different from the closed system of Hegelian dialectic. According to Gordin, this logic is at the core of Jewish philosophical system for Maimonides in medieval and Cohen in modern times.

Gordin had a design for a fully developed system of philosophy based on the logic of infinite judgement. However he has never realized this project. It is rather Levinas, under the influence of Gordin in his youth, who undertook his design, although the Lithuanian philosopher has never accepted the concept of "system" as his own. His first major work Totality and infinity has concretized the logic of infinite judgement in its life world phenomena and sketched the ontology of a society, which could not be absorbed into the State.

研究分野：哲学、倫理学、思想史

キーワード：無限判断 コーヘン ゴルディーン レヴィナス カント ヘーゲル マイモニデス 認識論

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで平成 22 年度から 24 年度まで日本学術振興会特別研究員 PD として、レヴィナスにおける西洋哲学史観の発生について研究を行った。この過程で、西洋哲学を〈同〉による〈他〉への暴力と規定したレヴィナスの大胆な哲学史観が、全イスラエル同盟で一九三〇年代同僚だったヤコブ・ゴルディーン (Jacob Gordin) が抱いていた「ユダヤ哲学史」の構想をある程度受け継いでいることが次第に明らかになった。萌芽的ではあれ、それがもっともよく読み取れるのが、ゴルディーンがベルリンのユダヤ教学アカデミー在籍中に出版した博士論文『無限判断の理論のための探求』(Untersuchungen zur Theorie des unendlichen Urteils, Akademie Verlag, 1929) である。

ゴルディーン的主張では、ヘルマン・コーヘンにおける「無限判断」とそのマイモニデス解釈がとりわけ重要とされているが、申請者は、先行的調査から、同じような論理がレヴィナスの『全体性と無限』にも読み取れると判断した。「無限判断」というテーマの哲学的主題の西洋哲学における変遷に関するより正確な再構成を踏まえたうえで、これら三人の思想家における哲学的メソッドとしての無限判断がどのように生かされ変形されているのかを解明することが本研究の目的であった。

## 2. 研究の目的

20 世紀前半の独仏ユダヤ系思想家(とりわけ本研究においてはヘルマン・コーヘン、ゴルディーン、エマニュエル・レヴィナス)について、個別研究は充実してきたものの、それぞれの思想家を貫く共通の論理については、研究はいまだ少ない。本研究は、申請者が世界的にみてもほとんど初めて本格的な研究を開始した、ユダヤ系哲学者ゴルディーンの残した思想的視座を出発点に、現代ユダヤ哲学の基盤としての無限判断の論理が、独仏ユダヤ系思想家、とりわけレヴィナスにおいてどのように変奏されているのかを明らかにする。これにより、「ユダヤ哲学」とさしあたり呼ぶことのできる潮流を、哲学的根拠をもって同定することができ、狭義の「西洋哲学」に対してどのようなオルタナティブを提供しているのかを明確にすることができる。

## 3. 研究の方法

(1) ゴルディーンが博士論文で再構成した無限判断の理論は抽象を極める。まずは『無

限判断の理論のための探求』を精読し、その基本論理を明確にする。その際、ゴルディーンの取り出した論理がどこまでコーヘンに忠実なのかにも留意する。

(2) 「無限判断」の論理は、コーヘンの認識論に見られるものとして扱われているが、晩年の作品である『ユダヤ教を源泉とした理性の宗教』どのように活かされているのか、ゴルディーンは論じていない。コーヘンにおいて無限判断論が一貫した方法論であるならば、この点を明らかにする必要がある。

(3) レヴィナスの主著『全体性と無限』は西洋哲学の「体系性」に対して批判的である。この点でレヴィナスは哲学をいまだ「体系」として構想していたコーヘンと袂を分かつたのであるが、「無限判断」の論理自体は逆説的にも体系に対抗する論理として受け継がれているように思われる。レヴィナスにおいてはとりわけ繁殖性や父子性を巡る議論が、生命としての人間を巡る無限性を扱っており、「無限判断」の実存論的なヴァリエーションとみなしうる。こうした仮説が妥当なものかどうか精査する。

## 4. 研究成果

### 【平成 25 年度】

平成 25 年度は『無限判断の理論のための探求』における無限判断の基本的特徴を抽出することに専念した。

#### (1) 歴史的位置づけ

本書によれば、無限判断は、古代ギリシアにおける非存在の思想を受け継ぎつつ、中世ではマイモニデス、現代ではコーヘンによって、その論理がようやく哲学体系の中心に据えられた。

#### (2) 基本論理

主語と述語を繫辞で結ぶあらゆる判断に先立つ、主語と述語の措定行為は、措定されるべき同一的な措定対象とは異なるものを対象領域から排除することによって成立する。同一性の根源としての他性を明るみに出すゆえに、無限判断は、同一的で全体論的な閉じた体系とは異なる、根源へと開かれた哲学体系の基盤となる。

#### (3) 体系構想

ゴルディーンはこの「根源の弁証法」をヘーゲルの閉じた全体論的な弁証法と対質させ、前者が後者を基礎付けるとしている。無限判断は哲学体系の基盤となるものであるが、ゴルディーンの所論はその論理を示すのみで、この論理に基づく体系構築は、

その構想のみが言及され実現されてはいない。

#### 【平成 26 年度】

平成 26 年度はレヴィナス『全体性と無限』がどのように無限判断の論理を継承発展させているかを明確にすることに専念した。

##### (1) ゴルディーンとの関係

複数の証言から、30 年代レヴィナスがマイモニデスやコーヘンについてゴルディーンから知識を得ていること、そして『無限判断の理論のための探求』のコーヘンとヘーゲルの対質についてもゴルディーンに捧げた小文で触れていることが明らかであり、何らかの影響関係を想定することができる。

##### (2) 体系への批判

『全体性と無限』は基本的なスタンスとして体系構築に対して批判的な立場を取ることで、ゴルディーンにおける体系構想という発想からは距離をとっている。しかし、それは体系を閉じたものと見なすからである。むしろ本書の構成自体は、体系的なものとして読むことができる。ただし、この場合「体系」は開かれたものとして構築されている。

##### (3) 無限判断の実存論的変形

ゴルディーンがコーヘンから抽出した無限判断論は純粹認識のなかに見いだされるものであったが、レヴィナスはこの論理を、人間の生の実存論的展開へと変形しつつ継承している。分離概念は、ある同一的な生の様態とそれを条件づける他性との関係を概念化したものである。『全体性と無限』では以下の諸相により分離概念が具体化されている。享受（享受する自我と元基態ないし女性的なもの）、倫理的関係（自我と顔）、エロスの関係（雄々しき主体と〈女性〉）、繁殖性（父と子）。

##### (4) 開かれた体系

ヘーゲルにおける家族と国家の関係を念頭に置きつつ、レヴィナスは、繁殖性による家族の時間を国家に回収されない開かれた時間性として構想しており、ゴルディーンが示した抽象的な体系の基礎を、人間の生の具体相において、開かれた人間的関係性として再構築している。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

- ① Tomokazu Baba, « Réduction lévinassienne de la philosophie moderne à travers les vécus marginalisés », Augustin Serrano de Haro (eds.), *Investigaciones fenomenológicas*, 査読有, vol. Monográfico 4/II (2013) : Razón y vida, pp. 39-59.
- ② 馬場智一, 「儒教、ユダヤ教、哲学—一九五七年ティウムリリンヌ会議における今道友信とエマニュエル・レヴィナス」, 『現代思想 いまなぜ儒教か』, 青土社, 査読無, 2014 年 3 月, vol.42-4, pp. 192-205.
- ③ 馬場智一, 「「ユダヤ哲学」の核心としての無限判断—ゴルディーン『無限判断の理論への探求』におけるその根拠と問題」, 『人文・自然研究』, 査読無, 第 7 号, 一橋大学大学教育開発センター, 2014 年 4 月, pp. 206-222.
- ④ Tomokazu BABA, « Philosophes à l'écoute dans la catastrophe continue », *Phasis*, 査読無, n° 2, 2014, pp. 35-47
- ⑤ 馬場智一, 「「ヨーロッパ」への抵抗—リオタールにおける「異教」」, *Contemporary Philosophy in the Age of Globalization*, vol. 5 : 「ヨーロッパ」とその他者, 査読無, CPAG, 2015 年, pp. 57- 70.
- ⑥ Tomokazu BABA, “The Paths to the Universal: Imamichi and Levinas in 1957 at Tioumliline”, ISHII Tsuyoshi (ed.), *Humanizing Asia: Rethinking Literature and Arts under the Situations of the Cold War*, 査読無, ICCT Series 2, UTCP Uehiro Booklet 6, UTCP / ICCT, 2015, pp. 11-30
- ⑦ 馬場智一, 「二つのモノダ論のあいだで—フッサールとハイデガーの聴講者レヴィナス」, 『倫理学年報』, 査読有, 第 64 集, 2015 年, pp. 161- 174

〔学会発表〕（計 10 件）

- ① 馬場智一, 「ユダヤ哲学の方法論としての無限判断」日本哲学会第 72 回大会一般研究発表, 2013 年 5 月 12 日, お茶の水女子大学
- ② 馬場智一, 「『全体性と無限』における無限判断」京都ユダヤ思想学会第六回学術会議, 2013 年 6 月 22 日, 同志社大学（烏丸キャンパス）

- ③ 馬場智一、「ユダヤ哲学と日本哲学、架橋のための準備的検討」科学研究費補助金・基盤研究C「近代日本哲学の紹介書出版に向けた日仏共同研究」研究会、研究会テーマ「近代日本哲学を西洋の言語と思考でとらえる」、2013年7月28日、京都大学
- ④ 馬場智一、「反理論と正義——リオタールにおけるパガニズム素描」2013年2月23日、ワークショップ「「ヨーロッパ」とその他者」、東京大学東洋文化研究所
- ⑤ Tomokazu BABA, « The Path to the Universal - Imamichi and Levinas in 1957 at Tioumliline », 国際シンポジウム「人文アジア——冷戦構造下の文と芸に対する再認識」, 2014年3月7日, 華東師範大学閔行キャンパス、中華人民共和国
- ⑥ 馬場智一、「融即から分離へ——ハイデガー講義『哲学入門』（一九二八～二九年）の聴講者レヴィナス」, ワークショップ「デリダ×ハイデガー×レヴィナス」, 2014年10月11日, 早稲田大学
- ⑦ 馬場智一、「物象化と剥き出しの生——Steineck氏の発表によせて」第九回一橋哲学フォーラム、2014年11月12日、一橋大学、
- ⑧ Tomokazu BABA, « Désastres, temporalités, et mémoires », INHA, "Tchernobyl - Fukushima. Quels Tournants?", 2014年12月6日、パリ第八大学、フランス
- ⑨ Tomokazu BABA, « Levinas, témoin du débat entre Husserl et Heidegger sur la monadologie », *Lectures levinassiennes : Une autre voie phénoménologique*, Ecole, 2014年12月9日、パリ高等師範学校、フランス
- ⑩ Tomokazu BABA, „ Menschenwürde und Verantwortlichkeit : aus der Perspektive des jüdischen Denkens Levinas und des Konfuzianismus“, Workshop „Zur Aktualität des Würdebegriffs“, 2015年3月10日、デュッセルドルフ大学、デュッセルドルフ、ドイツ

〔図書〕（計2件）

- ① ジャック・デリダ『哲学への権利 1』,

馬場智一、西山雄二、立花史人共訳、みすず書房、2014年、全309頁、担当部分 pp.169-265.

- ② ミヒャエル・クヴァンテ『人間の尊厳と人格の自律』加藤泰史監訳、馬場智一ほか訳、法政大学出版局、2015年、全350頁、担当部分 289-299頁.

〔産業財産権〕  
○出願状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等  
<http://tomokazubaba.jp>

6. 研究組織  
(1)研究代表者  
馬場 智一 (BABA, Tomokazu)  
長野県短期大学・多文化コミュニケーション学科・助教  
研究者番号：25884013

(2)研究分担者  
( )  
研究者番号：

(3)連携研究者  
( )  
研究者番号：